

令和 3 年度「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	なかたに ひろき 中谷 碩岐	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	檜垣 立哉	所属	人間科学研究科		
研究課題名	ジャック・デリダの前期思想における歴史の問題 ——デリダのフッサール読解に着目して——				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

(1)研究目的・本研究の特色

本研究は、20 世紀フランスを代表する哲学者のひとりであるジャック・デリダ(1930-2004)が理論的基盤を構築した 1960 年代の著作群における「歴史」という主題、及びこの主題に関するデリダの議論の間テクスト的な関係に着目することによって、この時期のデリダ思想の生成過程とその内実を明らかにすることを目的とするものである。近年、修士論文『フッサール哲学における発生の問題』(2007)、1964 年から高等師範学校においてデリダが最初に行った講義録『ハイデガー 存在の問いと歴史』(2020)の邦訳など、「脱構築の思想家」と呼ばれる以前のデリダの著作群が刊行されるにつれて、個別のテクスト読解を超えてデリダの思想形成そのものについて論じる優れた研究書も増加している。こうした先行研究において、「歴史」という主題はデリダの思想形成を研究する際のメルクマールのひとつと見なされてきた(cf. 亀井 2019a)。しかしながら、こうした先行研究の多くはデリダ思想に内在的な、通時的な思想の変化に着目することが多く、以下の点においては未だ十分な研究がなされていない。

①共時的な、即ち同年に刊行されたテクスト同士の理論的関係の分析。本研究に即して具体的に言えば、共に 1967 年に刊行された『声と現象』の議論と『グラマトロジーについて』における歴史に関する議論との関係の、先行研究における解明の不十分さ。

②同時期に「歴史」を扱っていた思想家との影響関係の検討。具体的には、デリダと同じく 60 年代に考古学的研究として歴史という問題系を思考していたミシェル・フーコーから、デリダの歴史概念に与えられた影響の、先行研究における解明の不十分さ。

それ故本研究は、従来のデリダの思想形成に関する研究を踏襲しつつ、十分に扱われてこなかった上記の主題を扱うことで、デリダの思想の内実をより明らかにすること、及び 1960 年代フランス思想史の中にデリダを位置付けることを目指した。

(2)研究計画・研究方法

当初の計画では、1960 年代のデリダの著作・講義録・インタビュー、及びその周囲の 20 世紀後半のフランス現代思想の文献に対する文献調査を中心に行うものであった。具体的には、デリダのそれ

ぞれの著作における「歴史」に対するデリダの態度を確認し、その後、哲学史における著作同士の関係などを確認しつつ、特にフッサールとハイデガーのそれぞれとデリダとの関係を追いながら、デリダ思想の変遷について検討する計画であった。扱う文献としては、研究開始時点で『幾何学の起源』「序説」(1962)、『声と現象』『グラマトロジーについて』(1967)、『エクリチュールと差異』(1967)、『哲学の余白』(1972)、1964-65 年の高等師範学校で行われたハイデガーに関する講義録、『ポジション』(1972)等を計画していた。

(3)研究経過

当初の計画通り、1960 年代のデリダの主要著作における「歴史」概念を巡るデリダの議論を整理し、それぞれの著作におけるデリダの歴史に関する態度、前後の著作との連続性と差異、同時代の他の哲学者からの影響の検討などの作業を行った。主に扱ったテキストは以下の通りである。

- ・『幾何学の起源』「序説」(1962)：以下「序説」
- ・『グラマトロジーについて』雑誌版(1965)及び書籍版(1967)：以下「雑誌版」及び「書籍版」
- ・『声と現象』(1967)

また、主著『グラマトロジーについて』における「エピステーメ」概念の位置付けを考えるうえで、ミシェル・フーコーの『言葉と物』(1966)及び『知の考古学』(1969)との関係を検討する必要があった為、当初の研究計画になかった 60 年代フーコーの歴史観との比較検討を行った。その反面、計画段階で予定していたハイデガーの思想との関係について、及び「時間」という審級において展開される主題群(特にハイデガーの「自己触発」)に関しては、立ち入って論じることが出来なかった。今後の課題とする。研究成果の具体的な内容については(4)研究成果に記す。

(4)研究成果

成果①『幾何学の起源』「序説」における二つの主題の整理

デリダの最初の刊行著作である「序説」について、その内容を精査し、『幾何学の起源』における歴史の本質的構造としての歴史的アプリオリと、それに対するデリダの解釈について検討した。フッサールが提示する歴史的アプリオリは、理念的対象としての幾何学的真理が、感性的な世界からどのように産出され、どのように伝承されてきたかという歴史のプロセスであり、フッサールはこれを全ての科学の本質的な構造として提示する(cf. OG, 286)。本研究は、先行研究を引きつつ『起源』で提示される歴史において

①根源的明証、及び明証の再想起を行う**超越論的主観性と、その形式である生き生きとした現在**

②個人の主観の中で生じた明証に、理念的客観性を獲得させる媒介としての**文書 écriture**

の二つの主題が重要な位置づけを占めていると指摘し、「序説」においてデリダが、それぞれの主題についてフッサールがどういう立場を採っているかとみなしているか、そしてデリダ自身がどのような立場を採っているかを明らかにした。以下、それぞれの主題に関連する限りで、その概略を述べる(その後の著作との接続については成果③に記す)。

まず、『幾何学の起源』におけるフッサールの議論はそれまでのフッサール現象学「諸原理の原理」、即ち現象学の原理としての「存在者を「それ自体—そこに」という意識において把握すること」(OG, 263-264)を前提としており、(主題①) そうした意識それ自体の形式は『幾何学の起源』において主題として提起されることはないⁱⁱ。また、個人的な主観における明証は「文字に書かれ、記録された言語

表現」(OG, 272)の媒介を通じて初めて、普遍的に真理である理念的対象としての客観性を獲得するが、その際言語は根源的明証を再び蘇生する為に(主題⑧)「疑いもなく本来の意味の同一性において蘇生可能」であり「同一なまま反復可能」(OG, 275)であるような言表であることが求められる。

こうしたフッサールの議論(と議論の不在)に対し、(主題④) デリダは現象学における主観性である“超越論的主観性”と、その形式である“生き生きとした現在”を明示的に強調し、その内実に繰り返し言及している(eg. IOG, 69, 121)ⁱⁱⁱ。そして、デリダは師でもある哲学者イポリットを引きつつ、理念的対象を構成するものとしての文書が「主観なき超越論的場」を構成し、この場が超越論的主観性の条件であるということを示唆している (IOG, 133)。しかし続く箇所、テキストがこうした超越論的なものとして捉えられ得るのは「超越論的主観性一般にとって理解可能であるという純粋な可能性」(IOG, 134)が保障されている限りであることが述べられる。ここからわかるのは、単に超越論的主観性に対して超越論的場としてのエクリチュールが先行するのではなく、両者はお互いを条件付け合うものであるということである。また、そうした言語は、フッサールが想定するような純粋に論理的な言語、透明な媒体として根源的明証の一義的な伝承を常に可能にするような言語ではない。幾何学的真理が普遍的な客観性を獲得する為にはそれが個人の主観から断絶し得る必要があり、そうである以上それは伝承の断絶、「真理の消失の可能性」(IOG, 138)を持つからである。「序説」において(主題⑧)言語は、理念的対象の必須の条件でありつつ、事実的なその消失の原因ともなる両義的なものとして捉えられていたのである。

先行研究においても、「序説」の議論は主題④、即ち言語を活性化させる主観性に着目した整理(cf. 松田 2020)か、主題⑧、即ち真理の伝承を可能にし、不可能にもするような「主観性なき超越論的場」としての文書の性質に着目した整理(cf. 小川 2017, 亀井 2019a)がなされてきた。それに対し本研究は、こうしたフッサールの議論に対して行われるデリダの読解において着目すべきは、既に見た通り、一見異なる④の論点と⑧の論点が「お互いを条件付け合う」という形で密接に関わっているという点であると主張した。このように「序説」においては、後に主著『グラマトロジーについて』で扱われる言語あるいはエクリチュールという主題と、『声と現象』で扱われる「生き生きとした現在」という主題とが、相互に関連した形で提示されている。本研究で「序説」をこの二つの主題に従って整理し、その上で後年の著作との関連を指摘することで、従来その関係が周知されつつも、デリダの思想の発展史においては別個に論じられてきた『グラマトロジーについて』と『声と現象』の理論的関係を明らかにした(詳細は成果③に記す)。

成果②『グラマトロジーについて』におけるエピステーメー概念とフーコーとの関係の解明

デリダの主著『グラマトロジーについて』第一部の初出版である『クリティーク』誌 1965 年 12 月号と、1967 年に出版される『グラマトロジーについて』第一部の比較検討を行い、その際「エピステーメー」という語に関する議論が大幅に追記されている(eg. DG, 28-29, 64, 68-69, 191, 193-194)ことを指摘した。この語は書籍版以前に既にデリダによって用いられているものである(eg. IOG, 191.H, 143.ED, 577-578)が、そうした議論との連続性という観点からは「何故 1965 年に書かれなかったのにも関わらず、1967 年に加筆されるのか」という論点を取り逃してしまう。本研究は 1966 年にミシェル・フーコーが『言葉と物』でエピステーメー概念を提示していたこと、彼が 60 年代に行った考古学的研究に『幾何学の起源』で提示されたような現象学的な歴史に対する批判的態度が見られることに着目し、67 年の「エピステーメー」に関する追記がこのフーコーの仕事を意識したものであるという仮説のもと、両者のエピステーメー概念の差異(cf. DG, 282)が現象学的な歴史に対する態度の違いに起因すると考えられることを指摘した。従来この両者は「コギトと狂気の歴史」に端を発するデリダ=フーコー論

争を通じて議論されることが殆どであり(cf.廣瀬 2006)、本研究に独特の論点であると思われる^{iv}。

フーコーにおいて「エピステーメー」の断絶や分節が強調されることによって、連続的な歴史を保証する主体としての超越論的主体が批判されるのに対し、デリダは「エピステーメー」と言う語で西洋の形而上学的時代全体を名指し、それが端的に終末を迎えることがないことを繰り返し指摘している(cf.DG, 18.Po, 25)。それ故、デリダが『グラマトロジーについて』において形而上学の歴史を語る際には、それは単線状の、継続したものとして理解する必要があることが確認された^v。

そして、ここから逆説的に明らかになるのは、デリダが素朴な意味での世界史の審級において、フーコーのような仕方で形而上学的な歴史を批判することは出来ないということである。ここから「デリダが歴史を問題にする際には、現象学における超越論的主体としての超越論的主観性それ自身が直接的に問いに付される」という結論が導かれ、この観点から 1967 年の著作の再検討を行った(詳細は成果③)。

成果③『声と現象』の議論と『グラマトロジーについて』における歴史の議論との理論的関係の提示

デリダは 1967 年に行われた対談(『ポジション』所収)において、以下のように述べている(Po, 11)。

①『声と現象』は「序説」と表裏一体である。

②『声と現象』は『グラマトロジーについて』の注として読み得る。

特に②、及び『グラマトロジーについて』に見られる『声と現象』を指示する複数の注から、従来からこの二つのテキストの強い連関はよく知られてきた。しかし管見の限りでは、近年のデリダ思想の発展を追う思想史的研究においてもこれらは別個に扱われることが多く^{vi}、この連関がデリダ思想の発展から捉えられることはなかった。本研究では、上記の①、②の研究成果を踏まえた上で、デリダの②の言及に着目し、「序説」における二つの主題が、1967 年の二冊の主著『声と現象』及び『グラマトロジーについて』において展開されたものの萌芽的な思索と見なし得ることを指摘した。また、それを通じて 1967 年の両著作の理論的な関係を提示した。

『声と現象』においては、フッサール現象学が現前の形而上学、即ち現在に特権的な価値を置く「独断論的あるいは思弁的な癒着」(VP, 10)として批判されるが、この時間問題になるのがまさに「生き生きとした現在」という意識の形式である(cf.VP, 13)。そして、この「生き生きとした現在」批判は、フッサールが言語の本質を考える際「純粹論理文法」、即ち「言語の論理的アプリアリ」(VP, 18)にのみ議論を限定していたこと、そして指標に対して表現を優越させ、エクリチュールに対してパロールを優越させることで現前性の特権を担保しようとしていたこと、そしてその身振りが実際には成立しないことを指摘することによって行われているのである。こうした議論を受けて本研究は、「序説」で既に指摘されていた主観性と文書の相互条件付けの関係が『声と現象』においても引き継がれており、言語の捉え方も「序説」の議論を更に深化させたものとして提示されている(cf.VP, 31)と主張した。

また、『グラマトロジーについて』においても『幾何学の起源』を指示しつつ「科学の対象である以前に、^{エクリチュール}文字言語はエピステーメーの条件である」「歴史性それ自身はエクリチュールの可能性と結びついている」(DG, 64)と述べられている。これは「序説」において提示されていた「歴史的アプリアリ」に文字が必要不可欠だったことを意味しており、「序説」の議論が『グラマトロジーについて』に引き継がれているとみなすことが出来るだろう。また、上述した『声と現象』の議論は『グラマトロジーについて』のにおいても重要な役割を担っている。既に見た通り(成果②)『グラマトロジーについて』において西洋の歴史全体がロゴス中心主義として批判される時には、超越論的主観性(即ち、その形式である生き生きとした現在)自体が問いに付されなければならなかったからである。

本研究は、こうした「序説」からの関係を視野に入れつつ、以下のように『声と現象』と『グラマ

トロジーについて』の歴史概念の理論的關係を提示することで、結論とした。

まず「序説」において提示されていたように、超越論的主観性と文書＝エクリチュールは相互に条件付け合う関係にある。しかし西洋の歴史を常に規定してきた現前の形而上学は、超越論的主観性の「現在」という形式（生き生きとした現在）を特権視し、そもそも超越論的主観性の条件でもあったエクリチュールの働きそれ自体を制限・隠蔽してしまっている。デリダは『声と現象』において超越論的主観性の「生き生きとした現在」がこうした現前の形而上学に基づくものであることを指摘すると同時に、それに基づいて西洋の歴史が規定されてきたこと、しかしそれはそもそもエクリチュールの働きによってまず可能であることを『グラマトロジーについて』で主張するのである。

(5)本研究の意義・今後の課題

デリダの思想の発展と言う観点から従来十分に明らかにされてこなかった『グラマトロジーについて』『声と現象』双方の理論的な関係を、「序説」における二つの主題との関係から明らかにすることで、前期デリダの思想形成の一端を明らかにすることが出来た。また『グラマトロジーについて』におけるデリダの歴史観(特に「エピステーメー」概念について)とフーコーのそれとを比較することで、両者の現象学に対する態度と論点の相違を明らかにすることが出来た。

本研究には課題もある。最も大きな課題として、ハイデガーの思想との関係を十分に検討することが出来なかった点が挙げられる。デリダは1962年の「序説」と1967年の『声と現象』『グラマトロジーについて』との間の時期である1964年に高等師範学校においてハイデガーを主題とした講義を行っており、「脱構築」という用語もこの講義で初めて用いられる。本研究では『ポジション』におけるデリダの直接的な指示を導きとして「序説」と『声と現象』『グラマトロジーについて』を接続したが、この講義も参照することで、より正確にデリダの思想の変化を追うことが出来ると考えられる。その他にも、前期デリダの思想形成を包括的に追うには『エクリチュールと差異』所収の各論との関係も検討する必要があるだろうし、或いは修士論文『フッサール哲学における発生の問題』とその後の議論との関係を問う必要もある。今後の課題としたい。

参考文献

ジャック・デリダの著作

DG：『グラマトロジーについて』上巻、足立訳、現代思潮社、1972年

ED：『エクリチュールと差異』合田ほか訳、法政大学出版局、2013年

H：『ハイデガー 存在の問いと歴史』亀井ほか訳、2020年

IOG：『幾何学の起源』「序説」田島ほか訳、青土社、2003年

(フッサール『幾何学の起源』本文からの引用は「OG」と表記する)

PA：「政治と友愛と」『批評空間』第Ⅱ期第九号、安川訳、1996年

PG：『フッサール哲学における発生の問題』合田ほか訳、みすず書房、2007年

Po：『ポジション』高橋訳、青土社、2000年

R：『ならず者たち』鶴飼ほか訳、みすず書房、2009年

VP：『声と現象』林訳、ちくま学芸文庫、2005年

De la grammatologie, Minuit, 1967

《De la grammatologie(I)》, in : *Critique*, 21(223), 1965

その他の一次文献・海外著作

デカルト『省察』山田訳、ちくま学芸文庫、2006 年
ハイデガー『存在と時間』高田訳、作品社、2013 年
ハイデガー『形而上学入門』川原訳、平凡社、1994 年
ハイデガー『ハイデガー全集第九巻 道標』辻村ほか訳、東京大学出版会、2021 年
ハイデガー『ハイデガー全集第五巻 杣径』茅野ほか訳、東京大学出版会、2021 年
フランク『フッサールの現象学』新田ほか訳、以文社、1982 年
フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷ほか訳、中公文庫、1995 年
フッサール『デカルト的省察』浜渦訳、岩波文庫、2001 年
フッサール『内的時間意識の現象学』谷訳、ちくま学芸文庫、2016 年
フーコー『知の考古学』慎改訳、河出文庫、2012 年
フーコー『言葉と物』渡辺/佐々木訳、2020 年
ペーターズ『デリダ伝』原/大森訳、白水社、2014 年
ヘグルンド『ラディカル無神論』吉松ほか訳、法政大学出版局、2017 年

その他の二次文献

東浩紀(1998)『存在論的、郵便的ージャック・デリダについて』新潮社
小川歩人(2017)「分散と組織化の界面としての身体ーデリダにおける *Leiblichkeit* 解釈についてー」『フランス哲学・思想研究』22 号,112-123
(2019)「デリダ『幾何学の起源』『序説』における「文学的理念性」の在処」『フランス哲学・思想研究』24 号,107-118
(2021)「閉域に滞留し、歴史を展開するー松田智裕『弁証法、戦争、解説』に寄せてー」『立命館大学人文科学研究所紀要』128 号,3-23
亀井大輔(2015)「自己伝承と自己触発 デリダの『ハイデガー』講義(1964-1965)について」『現代思想 2015 年 2 月臨時増刊号 総特集デリダ 10 年目の遺産相続』、青土社
(2018)「『フッサール『幾何学の起源』講義』ーデリダの読解との対比を通じて」
松葉ほか編『メルロ=ポンティ読本』、法政大学出版局
(2019a)『デリダ 歴史の思考』法政大学出版局
(2019b)「〈歴史の思考〉を更に進めるために：『デリダ 歴史の思考』補遺」
『立命館大学人文科学研究所紀要』120 号,151-164
木田ほか編(2014)『現象学辞典』弘文堂
郷原佳以(2019)「哲学的言説の隘路：亀井大輔『デリダ 歴史の思考』について」『立命館大学人文科学研究所紀要』120 号,129-150
榊原哲也(2009)『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』東京大学出版会
慎改康之(1997)「フーコーの現象学 『解釈』をめぐって」『現代思想』25 巻 3 号,148-156
高橋哲哉(1992)『逆光のロゴス 現代哲学のコンテクスト』未来社
長坂真澄(2015)「「存在」の語を抹消する交差線ー差延：デリダの『ハイデガー』講義(1964-65)より」
『宗教学研究室紀要』12 号,62-97
廣瀬浩司(2006)『デリダ 来るべき痕跡の記憶』白水社
松田智裕(2015)「新たなものの出現としての出来事ーデリダにおける出来事、偶然性、事実性をめぐってー」『フランス哲学・思想研究』20 号,270-279

(2019)「アイノスは歴史的なのか：亀井大輔『デリダ 歴史の思考』について」
『立命館大学人文科学研究所紀要』120号,93-108

(2020)『弁証法・戦争・解読 前期デリダ思想の展開史』法政大学出版局

(2021)「応答と課題ーデリダをさらに「解読」するためにー」

『立命館大学人文科学研究所紀要』128号,52-68

宮崎裕助(2019)「「歴史をつくる」ージャック・デリダの系譜学的脱構築に向けて」

『立命館大学人文科学研究所紀要』120号,109-128

(2020)『ジャック・デリダ 死後の生を与える』岩波書店

ベアリング(2021)「これ以上、歴史を語らないでーデリダと哲学史の問題」松田訳『東京都立大学人文学報 フランス哲学』517-15号,43-73,松田訳

堀内友博(2018)「デリダのフッサール読解；『幾何学の起源』序説』から『声と現象』へ』『教育デザイン研究』9号,71-80

Kates,Joshua(2005):*Essential History. Jacques Derrida and the Development of Deconstruction*, Evanston & Illinois, Northwestern University Press, 2005

ⁱ これは単なる外在的な問いではなく、デリダの思想を理解する上で必要不可欠なものである。例えば、デリダ自身フーコーの「エピステーメー」概念を意識しながら自身の思想を提示していたからである。成果②を参照。

ⁱⁱ 実際「生き生きとした現在」という語は、『幾何学の起源』においては一度も用いられない

ⁱⁱⁱ こうした点から『序説』の議論においてフッサールに対する現前の形而上学の観点はまだ表立ってはいない」(亀井 2019a,111.また、亀井 2015 も参照)とする立場は、額面通りに受け取られる必要がある。フッサールに対しての明示的な批判が展開されないにせよ、既に「序説」の段階で『声と現象』の議論が萌芽的に存在していたと言えるだろう(亀井は、序説において「生き生きとした現在」の概念が導入されていることを強調している)。

^{iv} 慎改(1997)は 60 年代フーコーの現象学の扱いとデリダの脱構築理論との呼応の可能性を示唆しているが、その内実については論じていない。また、亀井(2019a)では「時代」という語を巡ってフーコーとデリダが対比されるが、扱うテキストと比較する論点の双方において異なる。

^v これは、デリダがこのような歴史観を手放しで支持しているということを意味しない。これはあくまでもフッサールが提示する歴史観に対するデリダの態度を整理するものであり、デリダ自身は例えば 1971 年のインタビューでフッサールやヘーゲルが提示するような「一つの一般的歴史ではなく [...] いくつかの歴史」(Po, 85)を志向すると主張している。しかし、デリダ自身が述べているように、形而上学的歴史は常に脱構築され、同時に形而上学によって再自己固有化されるのであるから(cf.Po, 86-87)、その両者は別物ではなく、常に相互に移行するものではないだろうか。そうであるならば、本研究で提示された歴史の捉え方は、デリダ自身の歴史概念の射程を明らかにする一助になるであろう。

^{vi} 例えば亀井(2019a)は、「序説」から『グラマトロジーについて』及び『声と現象』にかけての主題の連続性を指摘しているものの、相互の問題系の連関については述べていない。